

〔太閤記十四〕豊後守護大友○義 御折檻之事

覺 御使者福原右馬助、熊谷内藏允、

一先手之城々に有之者、及難儀之折節、可相救ため、つなぎの城々拵置、人數を入置候義、其段何も
存知之前也、然るを小西が急難百死一生なりと云共、不及助成、剩平壤之様子をも不聞合、逃崩
候事、前代未聞之仕立、不及是非候事、

一秀吉若年之昔より、此道に携と云共、終に吾勢越度を取事なかりし、是は殊に大明勢との合戦
なれば、日本のためかた／＼、以一きは可盡粉骨之處、武名にも不耻、忠義之心もなかりし事、武
士たる上、絶言語事也、向後のため、一命をも可被果之義なりと云共、頼朝卿より久しく傳りし
家を、可及断絶も、聊道に違ふやうにも覺え侍るに因て、死罪を宥め、畢能武士之上を吟味し、悔
前非可申事、○中

一其身之事は、安藝宰相所に預置候事、○中

文祿二年五月朔日

秀吉在判

高麗陣衆各御中

國府

〔倭名類聚抄五〕豊後國國府在

〔豊州志十三〕豊後大分郡府内城在笠和郷府内即府中、舊國府所在、今之城地、慶長二年所移、故呼其舊地、
又曰大友殿大友殿

〔豊薩軍記〕大友家系譜事

能直より二十代の嫡孫をば、大友左衛門督義鎮とぞ申ける、父義鑑アキカミの時より數ヶ國を領し、殊に
義鎮跨竈の才ありて、智謀いみじかりければ、武威列國に輝き、名ある武士皆其麾下に屬して、豊
府の繁榮前代に超過し、京鎌倉にもをさ／＼劣るべからず、異國の商舶初めは筑前の博多の浦